

研究テーマ「**確かな学力と豊かな心を持った生徒の育成**」

～考え、表現し、かかわりあい、学びあう仲間づくり～

米子市立東山中学校

1 研究テーマについて

「確かな学力」と「豊かな心」は密接に関わり合っている。「確かな学力」が「豊かな心」をはぐくみ、「豊かな心」が「確かな学力」をはぐくむ。「確かな学力」の育成には、指導方法の工夫改善とともに、安心して学べる学級集団づくりが不可欠である。また、学び合い、高め合いながら確かな学力を身につけていく過程の中に、自分や他人のよさを認め、協力し合って何事にも前向きに取り組む自己を向上させようとする「豊かな心」がはぐくまれていく。

本校では、これまで、この互いに深くかかわり合う「確かな学力」と「豊かな心」を育てていくことをテーマに、研究に取り組んできた。

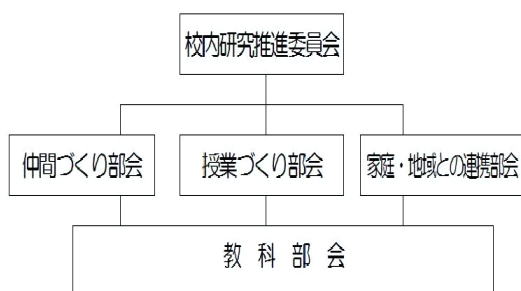
2 本年度の研究について

本校は、米子市の中心部に位置する生徒数340名、学級数13、教職員数29名の学校である。生徒は、全般的に意欲的に学校生活を送っており、授業にも落ち着いて取り組んでいる。しかし、日頃の授業では、基本的な知識について確認する発問に対しては活発に発言できる良さがある反面、自分の気持ちを伝えたり、自分の言葉で説明する場面になると、挙手が減るといった傾向も見られる。

全国学力・学習状況調査の結果では、全体的には全国平均・県平均を上回る結果となったものの、説明したり、根拠となる事柄について述べる質問で無回答が目立ち、これらの結果からも、本校の生徒は「知識及び技能を活用する力」が不十分という結果が明らかになっている。

このような実態から、授業の中に思考力・判断力・表現力の育成の場면을意図的に組み入れていくことが必要と考え、本年度は、研究テーマに、新たにサブテーマ～考え、表現し、かかわりあい、学びあう仲間づくり～を設定し、特に「言語活動の充実」と「かかわりあい」をキーワードとして、授業改善を進めた。

校内研究推進体制



左は、本校の校内研究推進体制である。言語活動の充実を図るという研究の方向性から、教科部会を充実させることが必要と感じ、昨年までなかった教科部会を体制に組み入れた。しかし、当初は「自分の教科で、言語活動を具体的にどうやって授業に取り入れていくのか、イメージがつかみにくい」という声もあり、教科の特性の違いを乗り越えて、一つのものに向かえる研究するために、どう取り組めばいいのか、という大きな課題を持ちながら、本年度の研究をスタートした。

3 研究の内容

(1) 学習環境の整備

- 集団の中で安心して、意欲的に学習できる環境をつくるため、「学習規律」を各教室に掲示し、相手意識を大切にしながら、教科の力をつける学習ができるための環境づくりに心がけた。
- どの授業でも「今日のめあて」を黒板に掲示することで、生徒が毎時間の学習の見通しを明確に持てるようにした。

充実した授業にするために
 ・指名されたら、返事をして立とう
 ・みんなのほうを向いて発言しよう
 ・発表者の方を向いて聞こう

(2) 授業改善への視点の明確化

○教科部会の充実

学期始めに教科部会をもち、各教科で「身につけたい力」を明確にし、単元の中に「言語活動の充実」と「かかわりあい」を意図した学習活動を盛り込むようにした。また、学期の終わりに振り返りをして成果と課題について話し合い、次の学期につなげた。

○宣言授業の実施

毎月2人ずつの授業公開を実施し、互いの授業を見せ合い、よかった点や改善点を明確にし、授業スキルの向上を図った。公開日は授業者自身が決め、その時間に授業のない教員が参観することとし、他クラスの授業に支障がでない範囲で行った。ただ、同じ教科の教員はなるべく参観できるよう、授業変更をするようにした。

○「授業をみる視点」の設定

宣言授業、あるいは研究授業では、「授業をみる視点」の項目に従って、参観教員が授業参観プリントにコメントを書く。項目は、「言語活動」と「かかわりあい」についての項目をはじめ、他教科の教員でも書き込みやすい内容になるようにした。授業後、コメントをみることで「自分の授業の問題点を把握できた」と実感している教員も多かった。

☆授業をみる視点(授業参観プリント)

授業展開にかかわること	授業規律にかかわること	仲間づくりにかかわること
○発問・展開	○あいさつ・返事	○生徒どうしのかかわり
○わかりやすさ (授業のめあて・内容・達成感)	○聞く・話す態度	○言語活動
○その他	○その他	○その他

(3) 仲間づくりの充実

互いを認め合い、高めあえる仲間づくりをめざして、学級づくり検討会を年度計画の中に、5回組み入れ、朝の会・終わりの会や行事への取り組みを通して、生徒どうしがよりよいかかわりをもてるよう、実践交流し、話し合っている。様々な行事の中でも、毎年行っている学級・学年人権弁論は、全校生徒が自分の思いをクラスで伝え合い、それぞれが自分の立場で応えていくことでつながりを深め、安心して自分の考えを伝えあう土台作りの一環となっている。

(4) 言語活動を意識した研究授業

自分の気持ちを伝えたり、自分の言葉で説明する力が足りないという本校の生徒の実態を受けて、スーパーバイザーのノートルダム清心女子大学・准教授 大滝一登先生から「言語活動」を論理的思考力をつける活動と位置づけ、根拠をもった説明をする場を設けることから始めてはどうかという指導助言をいただき、今年度は5回の研究授業を実施した。



(1年技術) 苗の植え替えの必要性を、よい土の条件を基にして考える。



(3年社会) 模擬裁判を体験し、刑事事件に基づいて、裁判員としてどういう判決をくだせばよいと思うかについて、自分の意見をまとめて説明する。



(2年数学) 五角形の角について考察し、どのように求めたかを、三角形の角についての性質を使って説明する。



(1年国語) 自分の書いた「今年の一文字」について、その字を選んだ理由、感想や工夫したところなどを相手に伝える。



(2年理科) 空気中に水(水蒸気)が存在し、温度により、空気中の水蒸気が水になることを実験から見だし、既習事項を使って身近な自然現象がおこるしくみについて説明する。

4 研究のまとめ（スーパーバイザー大滝先生の間わりの中で）

(1) 成果

- ・全教科の授業で、生徒が発表する時間や説明する場面を、以前より多く意識的に取り入れるようになってきた。
- ・宣言授業を行うことで他教科の授業を参観する機会が増え、「様々な授業をみることで、自分の教科での言語活動を生かしていくヒントを得ることができた」という声があった。他の先生の授業のよい点を授業改善に生かし、全体でスキルを高めていくという意識が、少しずつではあるが浸透しつつある。大滝先生にも、「授業改善がうまくいかないのは、教師どうしのスタンスの違いが原因することが多い」という指摘をいただいた。教師どうしが互いに理解し合い、高め合う雰囲気を大切にするためにも、宣言授業については引き続き継続していきたい。
- ・「かかわりあい」をキーワードとしたことで、ペア学習、話し合いを積極的に取り入れた授業が以前より多く展開されるようになり、生徒がわからないところを聞きあったり、スムーズに話し合いをもつことができるようになってきた。

(2) 課題

○ 手段としての言語活動

言語活動を授業の中に組み入れようとする時、言語活動そのものが目的になってしまわないよう、言語活動はあくまでも「ねらいの達成」につながる手段であることを常に忘れないように、というご指導をいただいた。これは全員で共通理解し、来年度の研究につなげたい。

○ 指導計画への位置づけ

言語活動を授業に取り入れていく中で、以前に学んだ内容とどうつなげるか、また、どう発展させていくかということをしっかりと考え、授業の構想を立てていく必要性を実感できた。生徒の思考力・判断力・表現力を高めるには、言語活動を各教科等の指導計画にきちんと位置づけ、単元構想をしっかり練ることができるよう、教科部会をさらに充実させたい。

また、評価規準に照らし合わせ、評価方法についても考えていく必要がある。

○ 研究の重点化

「言語活動」と「かかわりあい」を2本柱としたため、授業にどちらも組み入れようとするが無理があった。生徒に「わかった」という確かな実感を感じさせるため、質的なものをさらに高めていくことをめざしていったほうがよいのでは、という大滝先生の助言から、来年度の研究は、さらに「言語活動」に焦点をしばった取り組みをめざしていく方向を考えている。

○ 研究体制の見直し

本校の学校規模では、技能教科の教員が一人ずつしかいないので、同じ教科の教員どうしの話し合いができなかったこともあった。この改善方法を考え、教職員の研究への意識をさらに高めていく方策が必要だと感じている。再度、教科の違いを超えた教職員集団内での研究体制の構築について見直すことも来年度の課題である。

○ 家庭・小学校との連携

学習環境の整備として、基礎的・基本的な学力を定着させるために、学校だけではなく、家庭や小学校との連携を図り、学習習慣が確立するような方策も考えていきたい。